

広州日本人学校 国際理解教育の実践

前広州日本人学校 教諭

北見市立美山小学校 教諭 天野 昌明

キーワード：現地理解，異文化理解

1. はじめに

広州市は、広東省の省都として、華南地区の政治、経済、文化の中心都市である。香港、マカオにも近く、古くから中国の南の玄関として外国との交流も盛んであった。中華人民共和国成立後、毎年4月と10月に開かれる広州交易会（中国輸出商品交易会）は2007年に100回目を迎えた。

北緯23度8分、東経約113度17分に位置する広州市は、北回帰線が市の北方約40kmの地点を通過しているため、夏至のころには影が自分の真下にあるということが体験できる。

言語は普通語（北京語）と広東語が混在している。普通語が話せれば、日常生活で困ることはない。英語は、現地の学校教育でも力を入れていることもあり、若者の一部でコミュニケーションが可能であるが、それは、ホテルやデパートなどのごく一部である。英語のみでの日常生活は難しい。

気候は亜熱帯に属するが、起伏がある。夏は長く高温多湿、冬は日本に比べて暖かい。年平均気温は22℃である。年間降水量は1506mmで3～9月は雨季（高温多湿）になり、時折、昼が夜になり激しい雷と雨に見舞われることがある。11月から1月は雨も少なく、気温も15～20℃で1年間の中で一番過ごしやすい時期となる。その2月に春節（旧正月）を迎えるのである。

広州という地名は、三国時代、紀元226年に呉の孫権が合浦から北側を広州とし、南側を交州としたことに由来する。民間伝説によると、2000年余り前、5人の仙人がそれぞれ違う色の衣服をまとい、稲穂をくわえた5色の羊にまたがって天から降りてきて、5種類の穀物の種をこの地に贈り、五穀豊穡の地としたことから、広州は別名、五羊城、羊城、穗城とも呼ばれるようになった。市の北側にある越秀公園内には、その伝説を示す五羊石像があり観光スポットとなっている。

近代史においては、1841年5月にアヘン戦争があり、広州市内にその跡（鎮海楼、大砲など）が残っている。また、当時租界となった沙面には、現在も当時の商館などが残っている。

中国では、中央政府に教育部が置かれ、教育全般を統括している。地方の省・自治区・直轄市および県・市（区）には教育委員会（教育庁・教育局）が設けられている。

広州市の学齢児童の入学率はほぼ100%である。満6歳から7歳で小学校に入学する。新学期は9月からで、教科書は各家庭が書店で購入することから、この時期の大きな書店には教科書が大量にならべられている。

小学校（現地では“小学”と書く）は6年制で、初級中学（日本の中学校に相当する）、高級中学（日本の高校に相当する）、大学とあり、それぞれ3・3・4制である。

各学校の校門で「広東省一級」とか「広州市一級」というような表示をよく目にする。これらは特別な審査、児童の成績などにより申請が認められるらしい。



春節に獅子舞を披露～広州には、古い中国と新しい中国が混在している

特徴としては、まず、学校にお昼寝の時間があることである。学校給食はなく、お弁当という習慣もないため、お昼休みは自分の家に帰ったり、外で昼食を買って食べたりしている。学校にはお昼寝の部屋があり、マットと毛布、枕が敷き詰められているような施設を持つところもある。

また、中学や高校などでは、夕食後も学校で自習をするということがあり、午後9時過ぎまで学校で過ごすことが日常的にある。

一人っ子政策が続く中国では、我が子への教育に対する親の期待が大きい。放課後や休日は、少年宮などで習い事をしたり、学校の宿題や家庭学習に費やしたりする時間が多い。

ただし、これらの教育事情は都市部に限ったことである。個人的には農村部の状況はつかめないが、教科書をそろえることすら困難であることは容易に想像できる。英語教育なども、広州市の東風東路小学では小学1年生から行っているが、中国全土がそうではない。この面から考えると、日本の教育制度は、日本のどこにいても等しく保障されているという点で、大変優れている。

私が派遣された平成17年4月は、反日デモのまさにピークであった。インターネットを通じて人々が集まり、「愛国無罪」を合言葉に、破壊活動が行われた時期であった。子どもも親も、日本人も中国人も反感意識があった。例えば、児童に対し海外生活で学んだことをテーマに作文を書く授業をすると、中国に対する悪いイメージが綴られた。最後には早く日本に帰りたいと結ぶのである。そのような中で、現地理解、異文化理解といった教育活動は難しい。

ただし、反日デモはこの時だけで、以後は政治の面でも友好関係が築かれた。身のまわりの中国の方々は、みな優しく親切で思いやりのある方ばかりであった。同じ人間として、相手を思いやる心は世界共通であるということは揺るぎない。国や文化、言語が違って、相手を大切に思う気持ち大切なのだと思う。国際理解教育の意味はそこにあるのではないかと考えている。

2. 国際理解教育の実際

(1) 広州日本人学校 国際理解教育の全体構想

平成19年度の4月、広州日本人学校の国際理解教育全体構想の中で、国際理解教育の目標を次のように設定した。

- ① 互いに尊重し、相手の立場に立って考える態度や心情の育成。
- ② 相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや思想を表現できる能力の育成。
- ③ 広い視野をもち、自他の文化を理解し、尊重する態度の育成。
- ④ 国際社会において連帯・協力する態度の育成。

具体的な目標としては、互いを尊重し認め合い、相手の立場に立って行動できることと、互いの考えの共通点や相違点を理解した上で自分の考えや意思を表現することである。

目指す児童・生徒の姿としては、「同じ地球に住むものとして、異文化を尊重しながら、全ての人々と共に協力し、考え、判断し、行動する児童・生徒」と定め、次のように細分化するとともに、発達段階に合わせた姿を考えた。

- ・自国の文化や伝統に誇りをもち、協力して生きていこうとする児童・生徒
- ・他国の文化や伝統を知り、他国の人々と共生していこうとする児童・生徒
- ・進んでコミュニケーションをし、互いに理解し合おうとする児童・生徒
- ・自分なりの判断基準をもち、進んで行動しようとする児童・生徒

第1表 広州日本人学校 国際理解教育での目指す児童・生徒像

	低学年	中学年	高学年	中学部
文化・伝統	・広州に関心をもつ。 (身のまわりの人々)	・日本と中国の各地域の特色や文化伝統に関心をもつ。	・日本や中国の文化伝統を理解し尊重する。	・日本や中国をはじめ、諸外国の文化伝統を理解し尊重する。
コミュニケーション	・身近な外国語に興味をもつ。 ・誰にでも元気に挨拶をする。 ・からだ全体を使って自分を表現しようとする。	・身近で簡単な事柄を、外国語で表現する。 ・覚えた外国語を聞いたたり、進んで話そうとしたりする。 ・誰に対しても心を開き、意思を伝えようとする。	・外国語に興味をもち、進んで会話を楽しもうとする。 ・人前で、堂々と自分のことを伝えたり、相手の考えを受け止めたりできる。	・外国語を使って、日常的な会話や、簡単な情報交換ができる。 ・相手を理解しようと努め、かつ、自分の考えを積極的に表現しようとする。

(2) 年間計画

日々多忙化する中で、次の表にある実践を行っている。綿密な計画と現地校との打ち合わせが必要であるが、言葉の壁や、突然の変更など予期せぬこともある。教師にとってはそれも異文化理解の一つである。また、現地校の教師と夕食をかねての交流会もあり、まさに自分の中国語会話力やコミュニケーション力の実践の場である。

第2表 広州日本人学校 国際理解教育の年間計画

実施月	小学部	中学部
	内容	内容
4月	全体計画提示	
5月	中国の文化伝統を学ぶ会	
6月	小学部宿泊学習（5学年） *香港日本人学校大埔校との交流 ----- 東風東路小学との交流会（訪問交流）	私立華联大学との交流会（招待交流）
9月		中学部修学旅行（2学年：北京）
11月	小学部修学旅行（6学年：マカオ）	
12月	東風東路小学との交流（招待交流）	私立華联大学との交流会（訪問交流）

(3) 実践

① 東風東路小学との交流（訪問交流・歓迎交流）について

例年、5月は広州日本人学校の児童が東風東路小学に訪問し、東風東路小学側が中心に交流が進められる訪問交流と、逆に広州日本人学校側が中心に、東風東路小学の児童を招く12月の歓迎交流を実践している。

平成19年度の12月に行った交流は、「日本を紹介しながら、互いに交流し合い、お互い親しくなろう」をテーマとして、「日本人学校や日本文化を紹介し、交流することで、日本を知ってもらおう」「進んでコミュニケーションをし、互いに理解し合おうとする態度を育てる」「東風東路小学と交流することで、自分たちと異なる文化の中で生活している友だちを理解し、大切にしていこうとする心情を育てる」ことを目的とした。

各学年の交流内容は、「折り紙作り・折り紙を使ったゲーム（1学年）」「折り紙など・昔の遊びを作って遊ぶ（2学年）」「花笠音頭（3学年）」「紙相撲（4学年）」「10人11脚と折り紙（5学年）」「絵かるた作り・音楽（6学年）」というもので、日本文化を知ってもらおうと工夫している。

通訳として、中国籍を持つあるいは中国語が堪能な保護者で「言語ボランティア」の組織をつくり、日本人学校の事務部スタッフとともに当日のサポートをいただいている。

配慮事項として、楽しい交流であることは大切だが、交流の目的を意識したことである。特に、コミュニケーションに関しては、事前に中国語や英語の会話を練習し、交流会当日に児童が進んで伝えよう、会話していこうという姿が見られる内容を企画した。伝えられた、分かった、分かり合えた、という喜びを体験させた。

② 中国の文化伝統を学ぶ会

「中国の文化や伝統にふれることにより、異文化を正しく理解し、尊重しようとする気持ちを育てる」ことを目的としている。平成17年度は「中国音楽の鑑賞」、平成18年度は「中国雑伎の鑑賞」、平成19年度が「粵劇（えつげき）の鑑賞」であった。

各団体との交渉や打ち合わせは事務部が行い、当日の中国語と日本語の司会進行や、歓迎の飾りつけなどは児童・生徒が行っている。



粵劇の鑑賞～体験コーナーとして粵劇の化粧と衣装着用も体験した

③ 中国語会話・英会話の日常化と継続

全体構想との関連、及び、中国の在外教育施設であるという点から、コミュニケーションの道具（Tool）として中国語会話と英会話を日常化することを考えた。中国語会話、英会話を楽しみながら慣れ親しむことを目的として、会話表現の年間計画案を作成した。朝や帰りの時間、中国語会話、英会話の時間や委員会活動の時間を活用して活動を継続した。各学級に数名いる「国際交流委員会」の児童・生徒が、委員会の時間に練習した単語や会話表現をクラス内で指導したのである。また、現地校交流の前には、交流で必要になる言葉や文を中心に、単語や会話表現を指導する場を設けている。

3. おわりに

広州日本人学校での国際理解教育の実践内容についてまとめてきた。しかし、これらのことは、自分一人で企画し実践してきたのではない。教職員全員で協議し準備をしてきたものである。中でも、事務部や保護者の方々の支援は多大である。

現地理解を簡単に言えば、現地の人や物、文化などを好きになることではないかと考えている。異文化の中にあることを貴重なこと、幸せなこととして、貪欲に様々なことに関わっていくことが大切である。自分が望んで異文化の中にいる場合は別だが、日本人学校の児童・生徒の多くは、保護者の勤務の関係で海外生活をしているのである。時には、少年団活動や部活動の中心となって活躍していたのを断念して広州に来ている児童・生徒もいる。平成17年の反日デモやそれ以前からある中国に対するイメージもあって、広州での生活を否定的にとらえるものが多い。そのような中だからこそ、逆に現地理解や異文化理解、国際理解教育の必要性が問われている。

中国の人であろうと、誰であろうと、その人の国や言葉、文化などを大事に思うこと。たとえ言葉が通じなくても、何らかの方法で互いの気持ちや考えを伝え合おうとする意欲そのものが大事なのである。もっと簡単に言うならば、自分の身のまわりの人々を大切にする、互いに思いやるということである。

4年前は、政治家の靖国神社参拝や教科書の問題で反日デモへと発展した。最近では、民族間の問題や食の安全など、北京オリンピックの開催を前後して、中国の話題が事欠かない。そのような中であっても、差別・偏見で見るのではなく、互いを思いやる気持ちをもち続けとほしいと願う。国際理解教育の意義を今後も考え、実践していきたい。